

会議報告および インドネシアの舗装事情

- 目的

- インドネシアRDCRB(Research and Development Center for Road and Bridge、道路橋梁研究センター)と我が国の国土技術政策総合研究所ならびに土木研究所の共同ワークショップへの参加

- 行程

- 3月1日 公共事業省表敬訪問
道路橋梁研究所へ移動
- 3月2日 共同ワークショップ
- 3月3日 議事録(minutes)等の確認、
今後の協力に関する打合せ



公共事業省 (Ministry of Public Works) 研究総局(Agency for Research and Development)局長を表敬訪問

ワークショップ(1)

- 午前中は全体会合として、インドネシア公共事業省 Hermanto Dardak副大臣の講演やNILIMおよびPWRIの紹介など
- 上の写真の右が副大臣、左はRDCRB所長
- 写真には入りきっていないが、全体会議への参加者は200名程度



ワークショップ(2)

- 午後は各セッション(舗装、橋梁、交通)に分かれ、プレゼンおよび質疑応答
- 発表
 - 日本:舗装管理システムなどの紹介
 - インドネシア:舗装研究の現状、地震後の舗装の状況、天然アスファルト(AsBUTON)
- 舗装セッションは日本人が一人だけだったこともあり、質問が集中。聞き取るのがかなり大変。
- インドネシアの舗装技術者はBUTON等で採取される天然アスファルト(AsBUTON)に大きく期待。全体会議事の副大臣の講演でも触れていた。



最終打合せ

- 最終日(3月3日)の午前中にRDCRBにてワークショップの議事録等の最終確認。スクリーンに議事録案を映し出しながら白熱した議論となった。
- 下は会議中に持ち込まれたAsBUTON。10年以上前に土研に紹介された頃(右下のような感じ)と比べ、細かい砂分だけでなくミネラル分も抽出されており、見た目はかなりアスファルトっぽい。



インドネシアの舗装(1)

- ジャカルタ～バンドン間の高速道路。インドネシアでも最重要路線とのことで、それほど目立った損傷は見られなかった。ただし、平坦性はよくない。
- 聞いたところによると、この高速道路ですら供用後半年も経たずに破壊したとのこと。最重要路線であるので、破損するたびに頻繁に補修が為されているようである。路面の見た目と比較して平坦性が極端に悪いことも納得できた。
- 路盤材、もしくは路床土が吹き出している箇所が散見された。路盤・路床内に水が滞留し、大型車通行時に間隙水圧により吹き出しているものと見られる。路盤・路床の改善が必要と考えられるが、補修工法としては局所的な打ち換えを行っている。



インドネシアの舗装(2)

- アスファルト舗装の補修もかなり大胆。切削ではなく版を撤去している。壊れては直す、の繰り返しなのである。
- 頻繁に見かけるポットホール。高速道路を走る車は、こうしたポットホールをうまく避けながら時速100kmくらいで走行している。たまに避け損なうとかなりの衝撃が乗客を襲う。
- 実は写真を撮ることができなかったが、幹線道路以外の舗装は穴ぼこだらけ。高速道路、主要幹線道路の補修に手一杯で生活道路まで手が回らない様子。



ジャカルタ市内のバスレーン

- 交通混雑緩和のため、バス利用を促進しようとしており、バスレーンはしっかり確保されていた。
- バスレーンの所々に鉄道駅のようなバス停があり、乗客はここで乗り降りする。駅と歩道は歩道橋でつながっている。



バンドン市内の交通事情

- バンドン市はジャカルタから南東へ130kmの位置にある地方都市。人口は200万人程度。
- 公共交通機関としては路線バスの他、簡易な乗り合いバスもある。なお、路線バスも冷房付きと冷房無しの2種類ある。
- 市内の道路は日常的に渋滞しており、公共交通機関では定時制が全く確保できないため、バイクの利用がかなり多い。ちなみに、この写真において、センターラインは我々が乗車しているワゴンの脇。右に見えるバイクはセンターラインを超えて走行している。
- バイク、乗用車とも運転マナーは良いとは言い難い。ワークショップでも交通セッションでバイク交通をどうすべきかが議題として提起された。



インドネシア雑感

- インドネシアの人口は2億2000万人で世界最大のイスラム教国。
- 人口の1/3はジャワ島に集中しており、ジャカルタも含め交通はマヒ状態。公共交通機関としてバスだけでは不十分で、地下鉄の必要性を感じる。
- オランダ領であったにも関わらず車は左側通行。したがってハンドルは右側で、9割くらいは日本車、特にトヨタ車。
- 滞在期間を通じて、かなり親日的・友好的な印象。二国間会議で行っているのだから当然ではあるが、日本の技術に対する期待は並々ならぬものがある。写真はワークショップ全体会議時に土研代表としてプレゼントを交換するRDCRB所長と土木研究所舗装チーム上席研究員。

